

週刊新潮

8月16・23日夏季特大号

特別
定価390円

特
集
ワイド

「ロンドン五輪」遥かなる凱旋門



31

撮影 本田武士

日本め奇祭

隠岐 古典相撲大会

連日暑い日が続く7月28日、
相撲発祥の地ともいわれる
島根県隠岐の島は熱気につつまれた。
5年ぶりに開催された隠岐古典相撲に、
島内は夜を徹して沸きに沸いた。



7月28日、隠岐の島町総合体育館駐車場に設けられた土俵で17時から始まる、第14回隠岐古典相撲大会に島民たちが続々詰め掛けてきた。

この古典相撲は、神社の遷宮、ダム完成など島をあげての慶事を祝うために夜通し行われる相撲大会で、今回は総合病院が一新されたことを祝ってのものである。そもそも、約300年前に神社が改築された際の相撲奉納が始まりと伝えられる。一時途絶えていたが、昭和47年に再興された。

集落ごとに行われる出陣の宴



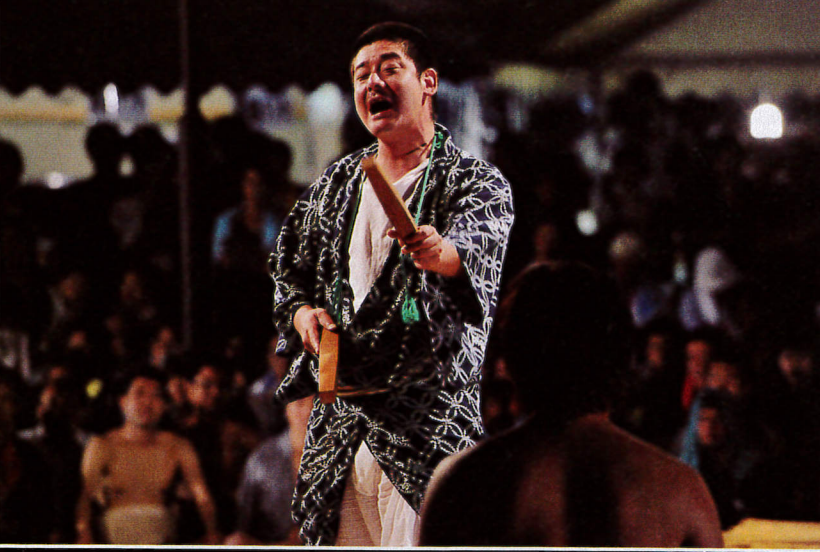
大会は行司口上から始まり、約4時間かけて出場力士の顔見世土俵入りが行われ、各地区から

ら集まった中学生から50代までの250人が土俵に上がった。実力者は役力士と呼ばれ、大会の華となる。大勢の観客が、役力士をはじめ、最良の力士に向かい塩をまいて応援する独特の光景が繰り広げられ、取組が始まる。取組は、同じ対戦相手同士で2番取るのが特徴。最初に勝った力士が次は負けるという、禍根を残さないための「人情相撲」だそう。土俵では、およそ300番の取組が行われ、終了したのは翌日の昼過ぎ

だった。

取組を終えると、役力士全員が土俵に着座し、行司の酌でお神酒を酌み交わし手締めを行う。活躍した役力士は、土俵を支えた柱が授与され、その柱にまたがって若い衆に担がれ、自宅に凱旋した。

この大会を題材にした川上健一の小説「渾身」が来年1月、「渾身 KONISHI N」(錦織良成監督)として映画公開される予定。ちなみに錦織監督が飛び入り参加し、大会に花を添えたという。



土俵に大量の塩がまかれる



上 拍子木を片手に声を張る呼出
中 過去の大会で活躍した力士による相撲踊り
下 授与された柱にまたがる勝ち力士